

# この記事がすごい！ 毎日新聞今週のこだわり4本



2024年11月3日号

編集／毎日新聞社カスタマーリレーション本部

## 静謐の人形作家、永瀬卓さんが見つめるもの

3日(日)=1、3面

迫る



人形作家の永瀬卓さん。  
隣は永瀬さんが作った「有間皇子」

今回取り上げるのは人形作家の永瀬卓さん。元美術教師で無名の存在でしたが、ひょんなことで作品がツイッターに載せられると、あれよあれよという間にファンを獲得しました。人形のモデルは、万葉の時代を生きた人々。有間皇子や大友皇子など、政争に敗れたり無実の罪を着せられて命を絶たれた悲劇の人物が多く、その苦悩が作品、

特に表情から見て取れます。

永瀬さんの作品を通して古代史をたどるという企画展が奈良で開かれ、2万人超もの来場者がありました。東京のアンテナショップでも展示されましたが、作品を見て涙を拭い、手を合わせる来場者もあったそうです。ここまで現代の人々の心を打つのはなぜなのでしょう。その背景に迫ります。

そこが聞きたい

### 孤立死は問題なのか

3日(日)=くらしナビ面

死んでもだれにも気づかれない、孤立死はなにが問題なのでしょう。悲惨なものだという決めつけもありますが、高齢化が進み単身世帯も増えるなかでは、すでに当たり前のことになっています。防止策ばかりに偏るべきではないと言う、日本福祉大学教授で同大健康社会研究センター長の斉藤雅茂さんに聞きました。



ノーベル平和賞受賞から一夜が明け、原爆慰霊碑に祈りを捧げる人たち



今年のノーベル平和賞に、日本原水爆被害者団体協議会が選出されました。「核兵器のない世界の実現に尽力し、核兵器が二度と使われないことを証言によって示してきた」。この授賞理由が示す被爆者自

らの精力的な活動が、世界で改めて注目を集めています。授賞の意義について、日本軍縮学会の初代会長、広島で平和研究を続ける国際政治学者、第五福竜丸事件を語り継ぐ学芸員の3人に聞きました。

論点 ノーベル平和賞 被団協受賞の意義は

6日(水)オピニオン面

特集 **ワイド**

### 社会学者・大澤真幸さん AIと文章作法

5日(火)=夕刊2面



チャットGPTなど生成AIの利用が広がっています。社会学者の大澤真幸さんは「AIが人の言語に近づくというより、人がAI仕様になっていく心配があります」と話します。「AI

で仕事がなくなるというより、仕事がつまらなくなる気がするんです」とも。「生成AI時代の言語論」という新刊を出したばかりの大澤さんが、旧知の記者とともに語ります。

竹橋の窓辺から

編集後記



毎日新聞

公益財団法人「日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団」(ホスピス財団)と毎日新聞社は10日、シンポジウム「大切な人を亡くすとき―どうしたらいい? 孤立と悲嘆―」をオンラインと会場(大阪府)のハイブリッドで開催します。「孤立・孤独」をどう乗り越えられるか。悲嘆学の大学教授、がん看護専門看護師、医療ソーシャルワーカーが実例を挙げながらアドバイスします。(木村葉子)

